バイオハザード

eclair13farron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード

【Ｎコード】

Ｎ６６４６Ｗ

【作者名】

ｅｃｌａｉｒ１３ｆａｒｒｏｎ

【あらすじ】

恐怖は人の最大の弱点かもしれない・・・

死者は人肉をもとめさまよう

人間は生き残れるのか！？

バイオハザードＣｈａｐｔｅｒ１（前書き）

私今回初めて挑戦します

バイオが大好きで
発売日にリバイバルセレクションを買ったのですが
なんと、その前日に入院

あらら
ドジを踏んだせいでなかなかプレイできませんでしたｗ

初心者ですが「まあ、見てやるか」みたいなノリで見て下さい＾＾

バイオハザードChapter1

Chapter1

・・・
・・・・
・・・・・。

この長い夢は、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか
普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚
気を抜くことすらできない
大切な人は死に、街は一晩で壊滅
人間の形をした化け物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる
「生き残る」
その言葉は何よりも重い気がしたのだ
俺の中での一生のトラウマであり続けるだろう・・・・・

休日の昼
ウォードはバーで飲んでいた
昼間から飲むのはいただけないが、仕事がなかったり、中毒で飲んでいるわけではない
彼の趣味なのだ
極度の酒好きに加え、ガンマニアである

後者は彼が元軍人だったので分からないこともない
自宅には酒のコレクションや、ハンドガンからマグナムに至るまで武器をコレクションしている

話を戻すと、なぜバーで飲んでいるかと言うと
同僚の女性警察ラムが遊びの誘いを断ったからである
特別気があるわけではないが、一人で行動することが苦手なウォードはラムが断ったと
分かった時からここにきて酒を飲もうとした算段である
バーのマスターが話してきた
「なあ、ウォード」「最近話題になっている人喰い病って知っているか？」
「ああ、警察の中でもメインで取り上げられているからな」とウォードは返した
「それに、俺が専属している特別警察ではそれに備えて訓練で最近厳しいよ」

人喰い病
最近この街で噂されている（ニュースにもなっている病気である）
病気であると言っても見た人がいないからあくまで比喩である
人間が人間を喰らいつくとかそういう噂である
実際死体が見つかった時、ぐちゃぐちゃな姿で見つかったのを映像で見たウォードである

ウォードはすでに結構な量の酒を飲んでいた
が、酒を飲んでも飲まれるな主義であるウォードはまだまだいける口だ
時間はそれなりに経っており、ガラス越しに空が暗んできた頃だった

「ガチャ」

「いらっしゃい」とマスター
しかし、様子が変だ
なんというか、インフルエンザで青ざめた人がふらふらしているみたいだ
うめき声も聞こえるし、目も白目をむいている
一般の客が心配して近寄ろうとした時、ウォードの直感が働いた
「そいつに近寄るな！！」
脚のホルスターからハンドガンを引き抜いて構えた
「動くな！動くなと言っている！！」
よろよろと近づいてくる

発砲した
「パン、パン」
左足に二発、しかし、動きが止まらない・・・
「こいつ・・・」
次は普通の人間なら動けなくなるだろう急所を撃った
「パァン」
止まらない
今までで初めてだ
強盗、テロリスト、そいつらの中でも撃たれても根性か何かで動く奴がいる
だが、動くといっても痛そうにはするし動きが鈍くなる
今のこいつにはそれが全くない
「マスター、ショットガンを貸してくれ」
マスターの生い立ちこそ知らないが、同じガンマニアとしてバーにはホンモノが飾ってある
だからこそウォードと話が合うのだろうが
「ガチャ、ズトォン」
胴体を撃ちぬいた
ようやく倒れ、動かなくなった

「もしかしたら、これが人喰い病・・・なのか！？」
マスターは言った

それと同時に、他の客が「これが最近噂になっている～～」何たらと騒ぎだし
パニックになった
店から何人か逃げ出した
「おい、中の方が安全だここに～」とウォードが言う前に消えていった
「うわぁ何だ来るな」「ぐわぁぁぁぁぁーー」
すぐに聞こえてきた声は、間違いなく今さっき出て行った連中のそれだ
客の一人がドアに鍵をかけた
「おいおい、喰われているぞアイツら」「どうなっているんだよぉ」
「ひぃ！」
男は尻もちをついた
ガラスに奴らが張り付いている
「お前らの肉も喰わせろ」とは言っていないが、動作で分かる
低下しているだろう知能で強化ガラスを懸命に叩いている
人間よりも力が強いのは見ていれば分かる
「おい、皆各々武器をマスターから貰え」
「ここはマスターと俺で時間を稼ぐから、裏口から逃げろ」
「近くの病院に逃げ込め！」
「それでいいよな？マスター！試し撃ちがしたかったんだろ！？」
とウォードが言った
「へっ！悪い冗談言ってくれるなよ」「こっちだってちびりそうなんだ」
「まあいい、このデザートイーグルを試食させてやるから感謝しな化け物」
強化ガラスの先にバリケードとしてイスやテーブルをを固めた

クモの巣のようなヒビが徐々に大きくなっていく

！！！

バリンという音とともに奴らがダラダラッと流れ込んできた
すでに他の客はここにはいない
ウォードがショットガン
マスターがデザートイーグルを構え発砲した
やはりハンドガンと違い、威力が高い
頭部に一発撃ち込むときれいに吹き飛ぶ
マスターのデザートイーグルは言うまでもない
マスターのテンションも上がってきている

が、続々と流れ込んでくる化け物どもに弾が追いついてこなくなってきた
二人とも勇敢に戦ってはいるが、人間の姿と何の変色もないこいつ等と
化け物じみた耐久力のこいつ等を相手にしていて恐怖や驚きが少なくとも隠せないでいた

ショットガンの弾は切れウォードはマシンガン
マスターは相変わらずデザートイーグル
「くそっ弾切れか・・・」マスターがポケットからマガジンを取りだそうとした時
手が滑った
無意識に手が汗ばんでいた
無理もない、こんな状況で平然を保てる人間など銀河系に一人もいないだろう
もう一つしかマガジンがなかったので、マスターは拾おうとした
もちろん奴らとの距離を保って

だが、倒れている奴のそばに落ちたマガジンを拾おうとした時であった
想像はつくだろう
「倒れている」だけで「死んでいる」訳ではなかった

「噛まれた」
やっと食べれると言わんばかりの噛む力である
「うおおおおお！」マスターは叫び、銃で思い切り頭を殴った
奴の動きは止まった
だが、手首の肉が見えるほど食いちぎられた
「マスター大丈夫か！？」
ウォードも気が抜けない状態で、マスターを見ることができないが
声で分かったのだろう

「ああ、だが手首を噛まれた」「骨が見えてやがる」
マスターが無事で（無事ではないが）ウォードは安心した
「そろそろ俺らも移動しよう、マスター」
「ああ、そうだな」「奴らとの距離が近いからな」
「まあ、お前だけ行けやウォード」
「アンタは？」

「なーに、俺はさっき脚を噛まれている」「一緒にいても足手まといだ」
実際マスターは、噛まれた手首のせいで気が散り、さらに銃の反動に対応しづらくなり
脚を二か所噛まれていた
「死ぬ気か！？」
「バカヤロー、こんなとこでくたばるかってんだ」「いいから先行け」
本来警察官である自分が残るべきなのに・・・

「警官のお前が、先病院に行った奴らを護ってやれ」
「くっ、分かった」「死ぬなよ」
ウォードは正義感が強い

マスターは一般市民
残るのは自分と考えるべきだが、他の奴を頼むと言われたら
人数からしてそちらを選ぶ
ウォードは裏口へ向かった

「ケッ！一体何体いるんだ、お前らは」
「デザートイーグル」反動が大きいこの銃は一般人が撃つことによって
健康を保証できない
それを何発も撃ち込むマスターの実力はそうとうなものだが、弾が切れた
ハンドガンでは対処できない
「さて、俺もそろそろ逃げるか」

裏口までは数十メートル
脚を引きずりながら向かった
「よしっのろまめ！これで・・・」追いつけないだろと言おうとした時である
裏口が開いた

ゆっくりと・・・・

マスターは血の気が引いた

裏口から入ってきた・・・・

よく考えれば、先に逃げた連中が何事もなく裏口から逃げれた方が
珍しい
これだけ侵入してくるコイツらは裏口からでも入ってこれるハズだ
からだ

いや、手はまだある
コレクションの一部をバーに持ってきている部屋がある
それも裏口の近く

ただパスワードが必要だ
「イエローシャンパン」これだけ打つのに
間違えなければ二秒で打てる

ただ、今は動揺、緊張、手首のけが
この複数のマイナスによって時間がかかっていた

カチカチカチ

あとは「パン」だけだ

距離は二メートル
イケる
と思ったが誤算だった

「飛びついてきた」
よりによって脚にしがみつき、噛みついたのだった
バランスが崩れよろけたスキに
待ってましたと言わんばかりに、奴らがのしかかる
耳はかじりとられ、腹からは内臓が飛び出し、喉も喰われて声が出

ない
「ハハっ、痛みすら感じねーな」と心の中で思った
視界は暗くなり、意識も遠のいた
そして深淵に引きずり込まれていった
二度と明けることのない暗闇に・・・・
・・・
・・・・
・・・・・
ウォードは途中化け物に遭遇したが、奴らの遅さと道の広さで相手にしていなかった
マシンガンの弾は切れて、愛銃のハンドガンだけを装備していた
病院が見えてきた
「着いたぞ、バーの連中は無事か！？」「マスター生きて来いよ」と心の中で思った
そして、地獄の入口へ吸い込まれて行った

バイオハザードＣｈａｐｔｅｒ１（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだ続くのは見ての通りです

あまり一つにまとめると疲れますしね

興味があったら次回も見て下さい＾＾

感想、評価気軽にして下さい

駄目だしもちろんＯＫです

バイオハザードＣｈａｐｔｅｒ２（前書き）

第２話

かなり遅くなりましたが完成しました

まあ、適当に上から目線でｒｅａｄしてあげて下さい

バイオハザードChapter2

Chapter2

高くそびえ立つ病院
こういう時にはなおさら大きく見える・・・

夜は気温が下がり「ヒュー」っと風が流れるのを感じる

後ろからは奴らが追ってきているので、さっさと病院に入った
普通の自動ドアは時間帯的に閉まっているので、非常口から入った

「ガチャリ」
鍵を閉めた
ウォードには考えがあった
病院の屋上にヘリを呼び助けを待つという考えだ

すぐに救助を要請した
「こちら特別警察ウォードだ、この街は汚染されている」
「人喰い病の影響だ、おそらく」「救助を要請する」

「分かった」「ただ、そこの病院なら少し時間が掛かる」

それを聞いた後通信機を切った

自動ドアに奴らが、張り付いている
どうやら、非常口から入ってこれない事や、今までの行動からして
知能は相当低いみたいだ

ただ、生命力、食欲といったものが著しく高い
まず、銃を撃っても構いなく近づいてくる
頭を強力な武器で吹き飛ばすのが得策だろう
まだ、奴らに関することはそれくらいしか分からなかった

「さて、バーから逃げてきた皆を探すか」
さっきから他の特別警察に連絡を取っているが、返事がない
女性警官ラムもそこに専属しているが、返事がなかった・・・
「みんな、無事だろうな」

ここの病院は1階から10階そして屋上がある
一つ一つウォードだけで生存者及びバーの皆を探すのは骨が折れるので
人手が欲しかった

その時だった
「ガサっ」音がした

「誰だ!?」
ウォードは愛銃のハンドガンを構えた

「おいおい、撃つなよ」「バーから逃げてきたやつだよ」
「奴らかと思って隠れていたんだ」
その男の名前はマービン

少し挙動不審だが、まあいいと思った
「マービン、これから俺とアンタでここの生存者を捜す」
「何もなければ、たくさんの生存者が見つかるハズだ」「病院だか

らな・・・」

まずは1階からだ
ウォードが左半分、マービンが右半分を担当
マービンはマスターからハンドガンを貰っていたので武器は大丈夫
そうだ
「いいか！もし遭遇したら頭を狙うんだ」
「分かったよ・・・はぁー何でこうなったのやら」

・・・
・・・・

マービンは普通の会社員
子供が二人いるので本来休日である今日は子供と遊んでいないとい
けないハズだ
だが、妻と喧嘩をしてやけをおこしてバーで酒を飲んでいた

マービンは家族の事が心配で仕方がなかった
本当なら今すぐ家族のもとに行かないといけないのだが
病院の外に出ることは、すなわち「死」を意味する

それを承知で助けに行こうとしたのだが、ウォードに止められた
「今は我慢しろと、あとで必ず助けるから」と
それに生存者を見つけヘリに乗ってポイントポイントに降りた方が
効率がいいと言われた

「確かに最終的には家族が助かる確率が上がるかもしれないから我
慢だ」と自分に言い聞かせた
夜の病院は暗かった
ほとんど見えず、緑の非常ランプが不気味さを際立たせるのに役に

たっていた

ガクガクと足が震えていた

病人のためのコンビニの所を通り掛かろうとした時だった

ゴソゴソと物音がした

マービンはへっぴり腰になりながら下手くそにハンドガンを構えた

手の中は汗だくだった

「奴らか！？」

口から心臓が飛び出そうだった

バーから病院に向かう時、捕まった人間がいくらかいた

どうなったのかは分からないが叫び声がしたのが耳にこびりついている

どうなったのかは分からない？

いや、死んだだろう

奴らによって

その奴らが今いると思うとパニックという言葉が可愛く思うほど動揺していた

が、出てきたのは人間だった

「って人間かよ」とマービン

安堵のため息をついた

「人がせっかく酔いをさますもん食ってんのによ・・・その銃でさ

めたわ」と男が言った
この後さらに奥を探索したが生存者を見つけられなかった
死亡者もいなかったのでここには「ルイ」というこの男しかいなかった

・・・
・・・・

時は少しさかのぼり
左側へ向かったウォード

マービンを一人で探索に行かせたウォードは心配していた
奴らと直接戦っていない一般市民を一人で探索に行かせるのはあまりにも無謀ではないか？
と自問していた

特別警察である自分がここまで動揺しているからだ
撃っても撃っても近づいてくる奴らは「恐怖」の塊でしかない
と思ったウォードは「いや、今は探索に集中しろ」と自分に言い聞かせた

だが、結局生存者は見つからなかった
死亡者もいないところを見ると先に上の階に上がっているのかもしれない

それに、奴らはどうやらいないようだ

真ん中の集合場所に戻るとマービンが一人の男を連れてちゃんと戻

っていた
「マービン、無事だったか！そっちの人は？」
「俺はルイだ、よろしくなおまわりさん」とルイが言った
集合場所の正面玄関の近くにあるガラスのカギのかかった自動ドアすでに多くの奴らがドアを叩いていた
バーの時より耐久があるので壊れはしないだろうと思った
するとマービンが「エレベーターは動かないな、階段を使うしかなさそうだ」と言った
確かに左側を探索した時に見かけたエレベーターも動かなかった
普通は動くはずだが・・・
仕方なしに階段を使い、2階の生存者を捜した
「ピシッ」ガラスにひびが入っていた
3階までは空間が1階まで見えていて、つまり見上げたり見下ろすと1階や3階が見える
診察を主にした1～3階のフロアである
もう1人生存者を発見した
リサという女性だ
看護婦で3階にずっと隠れていたらしい
「ん、ちょっと待てよ？」「バーの生存者じゃないのか！？」とウ

ォードは思った
しかも、さっきから奴らが全くいないところを見ると病院内で彼女しか見つからないのもおかしい
「この上の階に何かあるのか？」と思えずにいられなかった
リサも何も話したがらない、やはり何かある

４階

また、右側左側を二手に別れた
ウォード&リサチームとマービン&ルイ
戦闘能力を考えるとこの組み合わせしかない
マービンに通信機を持たせ、いつでも連絡できるようにしておいた
ウォード、マービン、ルイがハンドガンを所持して別れた
ウォードはしらみつぶしに病室を周ったのだが衝撃的だった

皆死んでいる
血まみれだ！しかも奴らに噛みつかれた後ではない
あきらかに第三者のせいだ
「リサはこの光景を見ていて、それで話せなくなったのか・・・？」
と心で思った
最後の病室もやはり残虐な絵が飛び込んでくるだけであった
「ポタ、ポタ」

！！！！「何だ！？」急に上から降って来た液体にウォードは驚いた

「な、なんなんだコイツは！？」

「化け物」という表現がふさわしいにも程がある！！

全身真っ赤の皮膚に脳みそが丸見えで、舌がベロンと垂れているし

かも、鋭い爪

戦闘のプロであるウォードは驚いた後すぐに冷静になった

「ん！？」

距離がほぼ真上の2～3メートルだというのに襲ってこない

「こいつ、目が見えないのか？」

やはりウォードの直感はあっていた

静かに行動すれば問題なさそうだ

ゆっくりと足音を立てずに右側に向かった、マービン&ルイの所へ

向かった

別れる所、つまり中心のところにリサを待機させ右側に向かおうと

した時

無線が入った

「ウウ、ウォード！化け、化けもんだ、たたたすけてくれ」と

「いいかよく聞け！絶対に物音をたてるなよ！！奴らは目が見えな

い」

「分かったよ・・・早く来てくれ」と小声でマービンは言った

急ぎ足で向かった奥から3番目の病室

奥の隅に二人でしゃがんでおり真ん中の天井に奴が張り付いていた

こっちにゆっくり来いとジェスチャーをした

まず、ルイがゆっくりゆっくりとこちら側へ来た

手や足がぶるぶる震えていたが何とかこちら側へ来ることができた

「さあ、マービンこっちだ」とウォードが仕草でやった

そろり

そろりと一歩前へ

しかし、上手くいかなかった

奴のよだれがマービンの肩に落ちた時、マービンが驚いて叫んでしまった

「ポトっ」

!!!!「ぎゃーーーぁあああ」

「しまった!!」

「ルイ!! ハンドガンの連射だ!」

ウォードとルイが二人でハンドガンを連射した

「バンバンバン」弾丸の嵐だ

奴は天井から落ちて動かなくなった

耐久だけで言うなら奴ら人型の化け物より上だった

これだけではすまなかった

ルイが「おいおい、何だよあれ！」と病室から出て叫んだ

ウォードも病室から出て確認すると、それは地獄絵図だった

さらに奥の病室からさっきの化け物がぞろぞろ出てきた

しかも、遠目にウォードたちが探索した左側からもぞろぞろ出てきている

どうやら繁殖して奴らの巣になっていたようだ

それがさっきの銃声で一斉に出てきたのだろう

「まずい！二人とも走れ」

幸い奴ら人型の化け物と同じで動きはのろまだった

リサと合流して5階に向かった

・・・

・・・・

１階のガラスには奴らの圧力で今にも壊れそうだった
数にして５００はいるだろう・・・

バイオハザードChapter2（後書き）

第3話頑張って作ります

いつになるのかな

バイオハザードAnother Chapter（前書き）

まず、タイトルのアナザーがｒが抜けていてすいません

時系列アナザー、チャプター1、チャプター2となります

バイオハザードAnother Chapter

・・・
・・・・

特別警察のメンバーは１０人

元軍人であったり、厳しい訓練を耐えて、筆記試験、体力試験など数多くの試練を乗り越えたものが所属できる、警察のスペシャリスト、そんな風にとらえてほしい

一人は、肉弾戦が得意でテロリストを数多く捕らえるもの

一人は、爆弾処理のスペシャリストであり数多くの爆弾を解除するもの

一人は、医療のスペシャリストであり数多くの薬品を調合し仲間を救ってきたもの

一人は、それら個性豊かな彼らをまとめるリーダーであるもの

・・・
・・・・

休日になる２日前の事であった

特別警察のリーダーである隊長のハイドは最近出勤していない

副隊長であり最年長のエドウィンが今は仕切っていた

「最近の人喰い病、こいつを俺達で調査する」とエドウィン

ホワイトボードに人喰い病の事件が起きている場所が多数書かれていた

そこに2人～4人で調査にあたることになった

それぞれが調査に向かった後、エドウィン達はある場所へ向かった

わずかな手掛かりのもとに

その手掛かりというものは、この都市の病院には恐らく地下が存在しており（もちろん一般市民は知らない）そこが今回の人喰い病と関わっている可能性があると思った

危険があると判断したエドウィンは、マルコ（狙撃？2援後の？1）とテラ（医療？1）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）の4人で向かうことにした

他の場所はウォード（狙撃？1戦闘プロ）とラム（爆弾解除、キーピック、医療）

レックス（各操縦のプロ）サム（重火器のプロ）ロイ（万能型）で各場所に散らばった

病院に着いたエドウィンはいつもと同じ光景の病院を眺めていた

「ここの地下に人喰い病に関する情報があるハズだ、気を引き締め

て取りかかるぞ」と言い

地下にいけそうな場所を４人で手分けして探した

小一時間探していると左奥の駐車場のコンクリートに不自然なあとがあるとレイラから連絡が来た

「コンコン」と叩いていると、「カン」という音がする部分が見つかった

まるでマンホールの蓋を叩いたかのような音

その部分に体重をかけると、重みで反対側が浮き上がった

「地下だ！ハシゴがある」とエドウィン

４人は順番に降りて行った

ここの構造はトンネルのようにある程度の広さがあり奥に続いているような造りだった

薄暗く、肌寒いこの場所に４人は益々気が引き締まった

４人とも、ハンドガンを装備して奥へ進んで行った

・・・・

・・・・・

「ククククク、ヒントをやったというのにここにたどり着くまで遅いぞ」「優秀な部下共よ」

薄暗い地下に分かりづらいところに設置してあるだろう監視カメラで４人が侵入してきたのを監視モニターからハイドは待ってたぞと言わんばかりに見ていた

彼らはハイドの、特別警察隊長ハイドの裏切りにより地獄に招待された

これから、絶命を迎えることなど彼らは知らずに・・・

バイオハザードAnother Chapter（後書き）

アナザーということであっさりと読めるようにしました

ネタがないとかでは決して・・・

バイオハザードChapter3（前書き）

意外にも見て下さっている方がいて、コメントまで残してくれるという

私にエネルギーを下さった皆様の為にも急いで書き上げました^^

気軽に見て下さい

バイオハザードChapter3

・・・
・・・・

４階の化け物を振り切り5階へたどり着いたウォード、マービン、ルイ、リサ

実際４人とも生存できたのは幸運と呼べる他なかった

いや、こんな状況で幸運などと言う単語は存在しない！

目の前に人の形をした奴が3体

ウォードはハンドガンで頭を撃ちぬく

「バン、バン、バン」あまたの訓練で身に付いた正確な射撃技術は、奴らの脳天をきれいに撃ちぬいた

奴らは動かなくなった

「ナースか・・・化けもんになったんだな」とウォード

一般市民であるマービン達にはこの一瞬の出来事に唖然としていたウォードがいなかったら、あっという間に丁度3人と3体でいい具合に料理されるに決まっている

現に銃を抜けなかったのだから・・・

「お前ら、常に気を抜くなよ、死にたくなければ」
「ああ、すまねぇ」とマービン
リサは４階の化け物にまだ驚いて震えている状態
ルイは何でこんなことにと、ブツブツ呟いていた
いずれにしてもこの状態はマズい
今後の探索に支障をきたす可能性が大だ
それに彼らに貸した銃には弾がほとんどないハズだ
ウォードはまだ数発に加え、マガジンが２つある
ここは自分１人で５階を探索する方が得策だと考えた
こういう時に、特別警察のメンバーがいてくれたらと思う・・・
一般市民を決して馬鹿にしている意味ではないが
それに正直、ウォード自身も正常ではなかった
テロリストの方が何倍もマシだ
メンバーがいてくれたらと思った時にあることを思い出した
おとといの特別警察がそれぞれ、人喰い病の探索に向かった時に

自分とラム以外のメンバーは帰って来なかったのを思い出した
連絡も取れなかったので、ラムと二人で彼らが探索に向かった先へ行ったが彼らはいなかった
それをふと思い出し、心配になった

・・・
・・・・

「ククククク、やはり素晴らしい射撃能力だな」「ウォード」

特別警察はいた

１０階の管理室、裏切り者の隊長「ハイド」・・・

「さて、１階のゾンビ共が侵入しそうだな」「ここはウォードの為にもちょっとした遊びをしよう」

ハイドは緊急ロックシステムを作動させ（警戒音なく）６階の階段へ続くシャッターを閉めてしまった

・・・
・・・・

５階には人型の奴らが数体いるだけで、生存者は０だった

それに、もっと最悪なのが６階に通じる階段のシャッターが閉まっているということだ

５階に着いた時には開いていたのだから、第三者の仕業に違いない
ここで働いているリサいわく、３階と１０階に制御装置があるらしい
緊急時に（火災や地震）どちらでも行けるように両方設置してある
らしい
当然第三者は１０階にいると考え、我々は3階にある制御装置でシ
ャッターを開ける必要がある訳だ
だが、「戻る」ということはすなわち「死」を意味するかもしれない
４階の化け物だってまだいる
奴らは聴力が劣っているため、乗り切れたとしてもそれでもリスク
が高い
が、誰かがやらないと先に進めない
「俺しかないわな・・・」
ウォードが誰よりも先に言おうと思った
だが、ルイが言った
「俺は、機械関係の仕事をしてんだから」「俺しかないわな」
恐怖への震えが隠し切れていない・・・それでもルイはそう言った

特別警察であるウォードでもロックを解除できる可能性はある

「あんたが下に降りたら、誰が俺らを守るんだよ」とルイ

「ま、生きて帰るから心配すんな」「酔っているから遊び感覚で行ってきてやるよ」

「おい、待・・・」とウォードが言おうとしたそばから、ルイは下に降りて行った

ルイの言っていることは正しい

ここでルイを待ってじっと我慢した

「・・・くそっ」

・・・

・・・・

５００体はいるだろうゾンビの群れ

ガラスの限界が来た

「バリィィン」という豪快な音とともにゾンビが侵入した

やっと入れて人間の肉を喰える、そんなやる気のある化け物どもに見える・・・

・・・

・・・・

４階に下りたルイ

化け物どもがまだ大量にいるかと思ったが、全くいなかった

「巣に戻る習性でもあるのか？」と一人つぶやいた

「まあいい、３階に急ぐぞ」

３階に行く途中で人間の化け物には出くわさなかったルイは

自分はラッキーな奴だと思っていた

その考えはすぐに無くなるのだが・・・

３階に下りて驚いた、否、絶望した

１階から3階は上と下が見えるようにつながっているフロアだ

「見てしまった」１階に侵入している化け物どもを

数が尋常じゃない

「なんだよこれぇぇ！？」ルイはパニック状態

早い奴ではもう2階の階段を上っている奴もいる

ルイは急いで管理室へ向かった

この状況で精神を強く保ち、逃げ出さなかった彼は称賛に値する

実際ルイが行って正解だった
手早い動作でシャッターを解除する、ここまでは誰でもできる
だが、ルイは思った
１０階から閉められたのなら、解除してもまた閉められたら意味がない
ならば、３階から１０階の管理室を操作できないようにいじくってやろうと
ウォードにはできない機械関係の仕事人ならではの事をした
ただ、シャッターを閉めるのとは違い１０階を操作できなくする
いわゆる、妨害は時間が要するものだった
管理室に置いてあるパソコンをカタカタと懸命に操作している
ルイがいる３階の管理室も監視モニターはある
１階にいた奴らの半数は２階に侵入しているのが見えた
「もう少しだ・・・」とつぶやくルイ
３階に少し侵入してきた奴ら
「よしっできた！これで１０階からはシャッターの操作は出来ない」

「俺以上の腕があれば別だが」

「ガチャッ」と管理室を開けた時「ここまでか・・・」と言うしかなかった

両サイドから化け物が、人間を見つけたのを確認し一斉にこちらに向かってきた

瞬間的に管理室に戻った

そこでルイはあるものをとりだした

ウォードがくれた手榴弾

もしかしたら予想していた、いやこうなることが分かってウォードは手榴弾をくれたのだろう

さらに、奴らに殺されるくらいならと突破口より死に方をくれたのかもしれないとルイは思った

もちろんウォードは突破口として渡したのだが、今の彼は突破する気はない

安全ピンを外した

鍵を閉めていた管理室は、圧力ですぐに壊れ奴らの侵入を許した

「へっ、お前らも道連れだ」

「ズドォォォン」管理室から煙が上がり奴らは一緒に吹き飛んだ

勇気ある者と一緒に・・・

・・・

・・・・

爆発音がウォード達にも聞こえた少し後

ウォード達はシャッターが開くのを待っていた

「ルイ・・・」とウォードが呟いた時

シャッターが開いた

「よしっ行くぞ！」

「おいおい、ルイを待たないのか！？」とマービン

「待つ必要はない・・・」

「おいっアンタそれでも警察か！？いや血の通った人間かよ！！！」

めずらしく口調の荒いマービン

だが、ウォードはひるまず

「ルイは！！ルイは俺たちのために犠牲になったんだ！！！！進む

しかないんだよ！！！」ウォードも怒鳴った

「何で死んだって言えるんだよ！！！分からないだろ！！！」

「手榴弾を渡した・・・」「あれは身を守るために渡したが、もうひとつ理由もある」

「??なんだよもう一つの理由って?」

「安楽死だ」「奴らに殺されるくらいならと渡しておいた」「俺としては突破口として使ってほしかったが、今さっき爆発音が聞こえただろ」

「あれから、時間が経ってもルイはここに来ていない」「だから、死んだんだ・・・」

「アンタはこうなることが分かってて行かせたのか!!!」

「誰がが犠牲にならないと先には進めないんだ!!!!」ウォードのこの怒りの口調はマービンにではなく、むしろ自分に言っているように思えた

それを感じ取ったマービンはこれ以上何も言わなかった

リサが「先に進みましょう」「彼の死を無駄にしたらいけない」と言った

「ああ、そうだな・・・」とウォードとマービンが言った

「さっきは熱くなってすまねぇ」とマービン

「いや、頼りない俺が悪い・・・」とウォードがすぐに言い返した

こうしている内にもゾンビたちは着々と上の階に侵入して行っていた

６階・・・

ここも生存者なし

ついでに受付のカウンターの上にハンドガンが２丁あった

ここで身を守っていた人のだろう

ウォードはマービンからライターを借りて、わざとシャッターの前で物を燃やし

防犯システムを作動させシャッターを閉めて７階に向かった

５００あまりある奴らを何分足止めできるか分からないがないよりはマシだろう

・・・

・・・・

「ウォード、お前の判断はすばらしいな」「ハンターをプレゼントしてやるからおもちゃにするといい・・・ククククク、ハハハハ」

管理室はルイとかいう男のせいでシャッターが閉められなくなった

ハイドも機械には相当強いのだから、驚いていた

監視モニターはきちんと働いているので、モニター越しからあるスイッチを押した

ハンターを2体投入した

「7階の侵入者を殺せ・・・・」

バイオハザードＣｈａｐｔｅｒ３（後書き）

作中で人型の化け物とかゾンビとか表現が異なっていますが
ウォード達は、もちろんゾンビという名前を知らない為人型の化け物と言っています

何か読み直して思ったんですけど、誤字脱字が意外にあったりします
出来るだけ修正をしたいと思いますが、前文などで理解していただけると思います（反省）

一方、ハイドはゾンビを知っているためゾンビと呼んでいます

バイオハザードAnother Chapter2（前書き）

アナザーの第2です
時系列は小説に乗っている順番ではないので勘違いなさらないよう・・・

一応休日にウォードが巻き込まれ
その2日前の出来事を、アナザーとして書いております

あいかわらず上から目線で読んで下さい
そっちの方が私としても気が楽です^^

バイオハザードAnother Chapter2

人喰い病に関係しているだろうと思われる病院の地下

もちろん一般人は地下があることなど知らない

一般人が知らない地下

恐らく今回の調査で一番危険であるからメンバーも４人にした

エドウィン（副隊長）マルコ（狙撃？2援後の？1）とテラ（医療？1）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）の４人で向かうことにした

・・・

・・・・

地下の奥

「ハイド様、ハンターに人工知能をつけたタイプ2ですが戦闘力はどうやって計るのです？」

「ククククク、今俺の優秀な部下がここを勘付いて向かってきている」

「だが、お前で計るとどうなるかな？」

「えっ、何をおっしゃるの・・・・ギャあああああ」

「フン、やはり凡人ではこの様か」

ハンタータイプ2はハイドの側にいた研究員を鋭い爪でひっかいて殺した

「ククククク、もう少しで完成するこのGウィルス」「Tウィルスという出来そこないとは違う」

「これを俺に投与し、人間を超え神になる」

「もう少しだ・・・」

ハイドは笑うのを止められなかった

・・・

・・・・

4人の背後にはハンター忍び寄っていた

「ザシュ」という首が鈍く裂かれた音をエドウィン、マルコ、テラは聞いた

「レイラァァ!!」

「お前ら構えるんだ」とエドウィンの合図とともに

銃弾の嵐が起きた

ハンターはしばらくじたばたしてすぐに動かなくなった

レイラは即死していた・・・
頸動脈を切られ、血がブワァーと流れ出ていた
「クソっ！何だこの化けもんは」とマルコ
「先に進んで調べる必要があるな、マルコ後ろの警戒をもっと強めるようにしろ」とエドウィンが言った
「了解」
しばらく進んでいると何かが近づいているのが確認できた
「二人とも前を見て」隊の中で唯一の女性テラが言った
ふらふらこっちに近づく人がいた
「やはり人がいたか・・・だが様子が変だ、うかつに近づくなよ」とエドウィン
1メートル位まで近づくと人は急に足を速め、エドウィンに掴みかかった
「ぐっ・・・なん、だ・・この力は」力の強いエドウィンが押し倒されかけている
「撃てっマルコ！」
「ズダダダァン」マシンガンを連射した

やはりこの地下はおかしい

人喰い病と関わっているのは、間違いなさそうだ

この先も何体かこういう奴らを始末し進んで行った

・・・

・・・・

「さあ、完成だ・・・」

カプセルからGウィルスを取りだしたハイドは満足そうな顔をしている

プスっ

注射器タイプのGウィルスをハイドは腕から注入した

その時、研究員のゾンビがハイドの方へ向かって来ていた

「ククク、ここはうかつに休憩もできんな」

今までも何体か襲ってきたが、全て頭を撃ちぬき問題なく対処していた

「今回は銃を使わない」とハイドは言い

ハイキックを繰り出した

ゾンビの頭に命中し何十メートルも吹き飛んだ

「！！ククククク、フハハハハ投与してから１０分でこれか」「最高の気分だ」

「しかし、ゾンビでは私の力は試めせんなぁ」「お前らよ」とハイドは振り返った

「ハイド、こんな所で何をしている！？」テラが言った

「何をしているかは身をもって体験しろ」

ハイドは瞬時にエドウィンに近づいて蹴り飛ばした

体重の重いエドウィンがフワッと浮き、ゾンビのように何十メートルも飛んだ

ズザザザァーと地面を滑る

「ゴホっゴホっ・・・何だこの力は！人間か！？」

「神だ」

次にマルコとテラに向かった

マルコはマシンガンを構え撃とうとするが、弾き飛ばされ掌打をくらわされた

テラはそのまま首を掴まれ、手刀を向けられている

「ヒュン」テラの心臓を貫こうとした時、エドウィンがハイドにタ

ックルした

「フン、貴様らの躊躇ないところ・・・」「俺が教えた教育はきちんと出来ているようだ」

「普通は仲間に銃は向けられないものだがな・・・」とハイドはやはりゾンビ共でなくお前達でないと戦闘力は計れないと言いたげに笑った

「何をしているのかと聞いているハイド！」とエドウィン

「ククククク、まあいい教えてやる」「この街を明後日壊滅させる、これはそのための力だ」

「そこのカプセルに入っているのは、タイラント」

「Gウィルスという究極のウィルスを投与して出来た化け物だ」

「病院の人間や街の人間を何百人と犠牲にしてやっと出来た一体だ」

「その究極のウィルスを私に投与し神になった」

「世界中にウィルスを撒き、選ばれた人間だけの世界を作る」「その頂点が私だ」

「正気なの？アナタ・・・そんなバカなことは私たちがさせない！」

「ククククク、強気だなテラ」「だが、そんな戯言は私を殺してから言え」

またハイドは消え、テラに近づいて掌打をくらわす

「うぅ・・・」壁に激突し、テラはうずくまった

恐らくはろっ骨をやられた

側にいたマルコには肘打ちを顎に

エドウィンには回し蹴りを当てる

「ククククク、どうした？私を止めるんじゃなかったのか？」

懐からハイドはハンドガンを取りだし、マルコに向けた

「まあ、貴様らに生きてここから出られては困るから遊びはここまでだ」

「バァン、バァン」

！！！！

ハイドの手からハンドガンが落とされた

「レックス、サム、ロイ！！！」テラが言った

エドウィンがハイドの元にたどり着く前、この三人増援を頼んでいた

「ナイスタイミングだ」とエドウィン

ポタポタハイドの手から血が流れる

「ククククク、流石は特別警察のメンバー手際がいい」

そう言うとハイドはタイラントの入っているカプセルのスイッチを押した

「ブシュゥゥ、ガチャン」ゆっくりとタイラントが出てきた

「さて、ここからだぞ貴様ら・・・」

「ザクッ、ブシュ、ドスッ」「ズダダダダァァン」銃声が鳴り響く

激しい戦闘は意外にもすぐに終わった

・・・

・・・・

特別警察7人は壊滅

ウォードとラムに連絡が繋がらなくここに来なかったのは不幸中の幸いかもしれない・・・

バイオハザードAnother Chapter2（後書き）

ラムのチャプターも考えております

彼女とウォードが通信できないのは、ハイドによる仕業です

特別警察の１０人は、それぞれの連絡先を知っていて

それにより連携をとられたくないハイドが通信をできないようにしました

いわゆるハッカーみたいなものでハイドはそれに長けているということになります

それはおいといて、感想や評価をよろしければ是非お願いします

作者パワーが上がります＾＾

バイオハザードRam　Chapter（前書き）

ラムチャプターです

全ての時間と並行して他のキャラが動いているって感じでしょうか

時系列　アナザー、アナザー2、チャプター1＋ラム、チャプター2、チャプター3です

チャプター1とラムは並行しています

まあ、気軽に読んで下さい＾＾

バイオハザードRam　Chapter

ラムはおとといの特別警察の行方が知れなくなったのを気がかりにしていた

携帯からも警察関係の人と連絡が出来なくなっている・・・

通信は常にあけておけ、と学ぶ彼女らからしたら心配になるのも無理はない

休日である今日、ラムは人喰い病に備え射撃場に行っていた

２５メートル離れた的をラムはベレッタ（ハンドガン）で狙っていた

ラムの愛銃だ

特別警察だけ所持している、ベレッタのグリップやフレームの色は通常のものとは異なる銃だ

さらに１０人が１０人でタイプの違うものを特注でき、ラムの場合安定した命中をするためのカスタマイズが施されていた

近くから見ていたら、銃を構えるラムは美しかった

「バンバンバン」

全て２５メートル離れた的に命中

その時

「すげぇ、すげぇー２５メートル離れた的に３連続」「しかも全て９０点以上かよ」

隣から声が聞こえてきた

「姉ちゃんすげぇな」「何かやっているのか？」と隣の若い男が聞いてきた

「ありがとう」「まあね、訓練ってとこかしら」少しうれしげにラムは答えた

「俺の名前はカイン、あんたは？」

「私はラム、どうしてここに？」

「どうもこうも最近人喰い病の噂があるじゃねーか」「それに備えてんの！」

「フフ、私も同じよ」

「ていうか、姉ちゃん何もんだ？あの射撃の腕は一般人じゃないことを吐露してるぜ」

「特別警察に所属しているの」

「！！へぇーあの警察のエリート軍団の一人なのか！そりぁさらに驚いたよ」

「アナタは？」

「俺は元自衛隊だったけど、今は建築関係の仕事！」「自衛隊時代けがして彼女を心配させてな、引退したんだ」とカイン

「てか姉ちゃんのベレッタ、カッコいいな！特注か？」

「ええ、私用に使いやすいよう改造してあるの」

「なるほどな・・・そうだ！最近の人喰い病」「あれはどうなってんだ？」

「おととい捜査に向かったわ・・・だけど7人が行方不明なの・・・」

「私達が向かった先に手掛かりがあまりなかったわ・・・」

「そうか・・・」とカインが行方不明で心配だろうのに掘り返して悪いと思ったようなトーンで返事した

それから2人は事件の事やお互いの事をしばらく話していた

「ズル、ズル、ズル」背後からまるでズボンの裾をひきずっているかのような音がした

2人は振り返り確認した

様子がおかしい

さっきの受付の男性

もともと受付の時から、体調がすぐれてなさそうだった

顔色は青く、病人みたいな状態だったのに異常な食欲で何かを食べていたことを思い出した

「おい、姉ちゃん！これってまさか・・・」

「まだ、分からないわ」「止まりなさい！！」

ラムの呼びかけに全く応じず、男性はズルズルとうめき声を上げながら近づいてくる

1メートルの距離で突然カインに掴みかかって来た

「ヴワァァァ」という声とともに口を開けて

危険だと判断したラムが男性の横腹に蹴りを入れた

ドチャと鈍く倒れ落ちた男性

「こいつ、俺を噛みつこうとしてきやがった」「人喰い病か！？」

まだ向かってくる男性にカインは発砲した

「バンバン」

右ひざに2発命中

だが、それがどうしたと言わんばかりに男性は近づいてくる

「!? ハァーどういうことだ? なぜ動ける??」

次に反対のひざを撃ったがまだ動いてくる

ラムが心臓を狙った

「バン」

普通の人間ならば即死する、人体の急所を撃ちぬいた

が、まだ動く

「人喰い病で確定ね・・・流石に驚いたわ」

頭部にラムとカインが1発ずつ撃ち込みようやく動かなくなった

「これ・・・街中の人間がなったらヤバいよな・・・」

「その悪い予感は的中したわ、見て!」

ラムの携帯をニュースに通信した

カインの予想は見事的中していて、街の至る所に人喰い病と見られる症状の人間が多数いるというライブ中継がしていた

人間とは呼べない、人間の形をしている化け物といった方が適当か・・・

ライブ中継の人も早く非難すればいいものの、巻き込まれて死亡している

「カイン、今から警察署に行くけどどうする？」「ここにいたらいずれ巻き込まれるわよ」

「なら付いて行くよ」「姉ちゃん1人よりも、俺がいた方がいいだろ」

「まあね、ていうか嫌がっても連れて行くけどね」

「強引なこって・・」

今からここの射撃場から少しある、警察署に向かう

特別警察も所属している、もちろんだがラムの仕事場でもある

そこに行って、警察官と武器を集め、人喰い病に対抗するという算段だ

車で２０分、日は暮れかけていた

車に乗っている途中、何人かふらふらしている人間を見たが恐らくは人喰い病の化け物だろう

「カイン、さっきから何をそわそわしているの？」

カインが少し落ち着かない様子を見てラムは聞いた

「いや、な・・」「病院で働いている彼女が心配でさ・・・リサっ

て言うんだけど」

「なら、先に病院に向かいましょう」

「すまないな、恩にきるよ」

この都市一番の病院に急きょ向かうことにした

日は暮れ、空が暗闇に包まれていった

病院の所で車を止め、入口から入ろうと思っていた

だが、入口に大量の化け物がいた

まるで、誰かを追いかけて来たかのように・・・

「これじゃ無理ね・・・やっぱり警察署に向かってヘリで屋上から向かいましょう」

「だな・・・悔しいけど死にに行くようなもんだからな」

ラムは、カインが冷静で助かったと思った

彼女が心配だから、それでも行かせろと言いだすかと案外思っていたが違って良かった

特別警察の中では操縦を得意としている者がいる

レックスというのだが、そのレックスのヘリを使って屋上に止めれば病院に行ける

特別警察は全てのメンバーがヘリを運転できる

ラムも例外ではなかった

警察署

街の安全を守るこの機関も、入る前からなんとなく頼りなく見えた

車から降りたラムとカインは正面玄関から警察署へ入って行った

・・・

・・・・

「ラム・・・お前にはタイラントを用意してやろう」

「ウォードは私が相手をしてやりたいからな・・・ククククク」

「生きて病院の屋上に来れたなら相手をしてやってもいいがな・・・」

映像越しにハイドは静かに笑った

バイオハザードRam　Chapter（後書き）

今更ですが、この話から読んでくれた人も、最初から読んでくれている方も

両方ともありがとうございます

よろしければ是非感想を書いてください（評価も）

チャプター4はもう少しで掲載しますので、今しばらくお待ち下さいな＾＾

バイオハザードＣｈａｐｔｅｒ４（前書き）

久しぶりの投稿です

毎回安定して何十人の方に読んでもらえるにはどうしたらいいんでしょうかね？

まず、検索かけても出てこないこの話をどうやって皆さんは読んでいるのか？

という疑問が生じました＾＾

バイオハザードChapter4

7階に向かった、ウォード、マービン、リサ・・・

ここに来るまでに1人を犠牲にした

警察である、しかも特別警察であるウォードはかなりの責任感を感じていた

ただ、前向きに落ち込んでいて「もういいや」とか「俺には何もできない」とか考えず

「次はこの二人を絶対に死なせない」とポジティブに考えていた

その時「ガシャァン」という激しい音がした

「何の音!?」リサは動揺を隠せない

「俺が見てくる」「二人はナースステーションの中で隠れていてくれ」

どの階でもそうだが階段を上がってすぐに、受付があるナースステーションがある

そこのカウンターの中に、マービンとリサは身を潜めた

それが罠だと知らずに・・・

・・・
・・・・
「ククククク、やはりウォード」「お前はその2人の為に身を挺して探索をしたか・・・」
「それが罠だがな・・・」
ハイドはハンターを1体だけ奥へ待機させ、大きな物音でウォードをおびき寄せた
もう1体をウォードがいない間に、ナースステーションに送りこんだ
悲鳴を聞こうが、ウォードが1体のハンターと戦っていれば
そう簡単に救助に向かうことはできない
ハイドは静かに笑っていた
「お前くらいは生きてここに来いよ・・・ウォード」「後は死んでかまわん」
・・・
・・・・
「ここにも生存者なしか・・・もう生き残りはいないかもしれんな」とウォードはつぶやいた
人型の化け物は数体いたが、距離をとって落ち着いて対処すれば大丈夫だった

大体、こんな奴らにいちいちびっくりしていては守れるものも守れない

物音の原因はまだ発見していない

新手の化け物かもしれない、そうウォードは思い警戒を強めた

やはり生存者はいないか、と最後の奥にある病室から出た時だった

目の前に、見たこともない化け物がいた

緑色の皮膚に爪をもつ、両生類のような化け物・・・

「お前が、物音の原因だったか・・・」妙に冷静な自分にウォードは驚いた

落ち着いて、ハンドガンを構える

狙いを定め引き金を引こうとした瞬間、化け物は飛びかかって爪を振ってきた

「!!!速い」ほぼ反射神経でよけたウォード

的確に首を狙ってきた化け物、当れば即死だ

「バンバンバン」3発頭部に撃ちこんだ

が、少しぐらついただけで倒れなかった

「ちっ、やはり奴らよりはしぶといか」と呟いた時だった

「きゃあああああ」とリサの悲鳴が聞こえてきた

「リサ！？何が起きた！！？」

少しの隙をハンターは逃さずウォードに飛びかかった

ウォードを爪は避けたものの、そのままのしかかられた

「グッ・・・なんて力だ」

片方の手でウォードの胴体を押さえつけ、もう片方を振り上げそのまま下ろそうとしている

「こ、いつ・・・」押さえつけられた手が振り払えず焦りを感じていた

リサとマービンも心配だが、そんなこと、いや、そんなこととは言ってはいけないが

そんなことを考えている余裕はない

正確に首を貫こうとしている手は、狙いが定まろうとしている

しかも、両腕を押さえつけられていて銃が使えない

「オラァァァァァーー」と叫んだウォードは渾身の蹴りを繰り出した

だが、ハンターは吹き飛ばず、少し持ち上がっただけだった

しかし、振り下ろされた爪はウォードの首から１０センチのところで止まった

ウォードはそのまま体を回転させ、ハンターを振り落とした

転倒したハンターをハンドガンで頭を撃ちぬいた

「バンバンバン」

ハンターはやっと動かなくなった

「ハアハア、二人は無事か！？」ウォードは二人の元へ向かった

・・・

・・・・

ウォードがハンターを倒す少し前、リサとマービンの前にハンターが現れた

「なんだこの化けもんは！？」とマービンが言った

「何よ、この化け物・・・」リサは口に手をやって驚いていた

ハンターは低い声で鳴き、マービンに飛びかかった

「ザクっ」

マービンの肩を思い切り抉った

「きゃあああああ」「マービン！！！」リサは絶叫する

かろうじて首への命中は免れたが、肩を抉られ血が出てきている

「くそっ次から次へと忙しいもんだぜ」マービンは片手でハンドガンを発砲した

「バンバンバン」「バンバンバン」「カチャ、カチャ」・・・

・・・弾切れだ

ウォードもまさかこの中央のナースステーションにこんな化け物が出てくるとは思ってもいないので2つあるうちの1つのマガジンを渡していない

人型の化け物なら6発もあれば1～2体くらい身を守れると思ったからだ

「万事休すか・・・ってかリサ？」「おい、リサ！どこへ行った？リサー」

ついさっきまでいたリサがいない

ハンターはマービンとの距離を縮めていった

「くそっ、ここまでか・・・家族に会いたかったな・・・」

ハンターは観念したか！と言わんばかりに低く鳴き、爪を振りかぶ

った

「ズドドドドドドドン」強烈な銃声がした

マービンは構えていた両手の隙間からつぶっていた目をゆっくり開けた

「リサ！！アンタが助けてくれたのか！」

リサは逃げていたわけではなかった

どこかに武器はないかとナースステーション内を探していた

結果３０秒という短い時間でマシンガンを見つけた

彼女の幸運にマービンは救われた

その時ウォードも合流した

「二人とも無事だったか！マービン！！」「くそっ間に合わなかったか」

「生きているぜ」「だから間に会ってるよウォード」とマービン

１０分間、休憩をしマービンはリサに包帯を巻いてもらった

命に別状はないみたいだ

ウォードはこう推測した

１０階で監視している奴は、頭の切れる奴でしかも
さっきのような化け物を操れる・・・
あのタイミングで化け物が2体現れれば、自然に出てきたという線は消える
つまり、人喰い病に関わる重要なやつに違いないと考え
「捕まえて聞き出す」と言いウォードは
「8階に行こう、もう少しでヘリも到着するころだ」とリサとマービンに言った
現時点で感染するということを知らない彼らは
感染した、否、感染してしまったマービンを連れ8階へ上った
奴らから攻撃され、傷口からTウィルスが入ると奴らと同じになることを知るのはもう少し後だ
・・・
・・・・
「ククククク、ウォードはやはり倒したか・・・いや、それよりも一般人2人が生き残ったのは意外だったな」
ハイドは、残念そうかうれしそうかどちらか分からない表情をしていた

・・・
・・・・

８階

もう生存者はいなんじゃないかという先入観のせいで探索する気が失せかけていたウォードだが

警察である自分がそんなこと思っていてはいけないと心にムチをうった

またマービンとリサをナースステーションに待機させるのは危険だと思ったが

連れて行っても、マービンの状態が状態なだけに連れていくのはもっと危険だと思った

マシンガンがある、それと二人を信じて８階の探索に向かった

まずは左側

下の階でもそうだったが、数体の化け物がいて様々な殺され方の死体がいくつもあった

「こいつも、噛みつかれて死んでいるな・・・」

「こいつは、貫かれた痕だ・・・」

「うぅぅ～」というううめき声でウォードは振り返った

人型の化け物が一体ゆらゆらと近づいてくる

「またか・・・」

「カチャ、バン・・・」薬莢が一発でて、銃口から煙があがる

脳天をぶち抜くことによって一撃で倒せると気付いたウォードが狙わない手はない

さっきから、銃弾によって殺された人間の死体がちらほらみえる・・・

「１０階の奴のしわざか？・・・」

そう思いながら左側の探索を終えた

次は右側

ハンドガンの弾はマガジンを含め３０発

９階、１０階の分を考えると無駄には出来ない

出来れば、舌の長い奴や緑の両生類とは戦いたくない

部屋に入ると奴らがいた

「3体・・・しかも死体に喰らいついているな」

こんな数を相手にしていては弾がもったいないと思い振り返ろうとすると

奴がいた

「チッ、どこから現れるんだよ」ウォードは銃を構えた

しかし、後ろの3体にも気付かれてしまった

「バンバンバンバン」1、2、3、4体全て撃破！

その腕前は流石特別警察射撃？1と言わざる得ない

わずかに位置がズレたら、頭部でも一撃では死なない

頭部の中でもさらに弱点の部分をたったの一撃で撃ちぬく彼の腕前は称賛に値する

その直後、ウォードは驚かされる

さっきまで3体に喰われていた死体が動き出した

「何！？死んでいたハズだが・・・」

「バン」その直後「バタッ」とゾンビが倒れる

「・・・奴らに喰われると・・・いや、奴らの成分か何かが入ると奴らのようになるのか？」

「！だとしたらマービンは！！・・・」「マズい早く戻らないと2人が！」

急いでナースステーションに戻った

「ハァ、無事か・・・」と安堵のため息をついたウォード

「ウォード、さっきからマービンの顔色が悪いの」「それもどんどんひどくなっている」

「ハァハァ、ヤベェんだウォード」「お前らが美味そうに見える・・・喰いつきたくて仕方がねぇ」

「マービンしっかりしろ!!」

「駄目だ・・・腹減った・・・人間の肉がほ、し、、い」マービンは言葉をろくにしゃべれていない

「うううぅ」奴らと同じようにマービンが襲いかかって来る

「クソっ!離れろリサ」ハンドガンを構えるウォード

「バン」

マービンは動かなくなった

１０階の奴に激しい怒りを覚えた

「化け物を送らなければこんなことには・・・絶対に捕まえる!!!」

ウォードは壁を思い切り殴った

そして、9階へと向かって行った

・・・2人犠牲にした、警察のウォードは市民を守れない悔しさと怒りで溢れていた

バイオハザードChapter4（後書き）

ありがとうございました

誤字脱字がありましたら言って下さい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6646w/

バイオハザード

2012年1月5日18時52分発行